

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第34回)

セレブなひと時

29年前に夫婦揃っての留学でロンドンに暮らしたとき、普通預金のCurrent Accountをそれぞれの名義で開いていた。当時はスーパーで買い物をするのも現金やカードよりも小切手を使うことが多く、このCurrent Accountは重宝した。これとは別に、同じ銀行のピカディリーサーカス支店に夫婦名義でHigher DepositのJoint Accountという口座を開いていた。帰国の際、口座はすべて閉じようとしたが、いや、今度は留学じゃなくて別の立場で必ずロンドンに戻ってくるぞ、という思いを込めて、Higher Depositの口座だけ残しておくことにした。と言っても、数万円程度の残金だったのだが…

その15年後に、大学の教員として、ロンドン大学の訪問研究者という立場でロンドンに戻ってきたとき、さっそくピカディリーサーカスの口座を確認しに行った——ない。口座が、ではなく、その支店がなくなっていたのだ。これにはあせったが、最寄りの支店に駆け込み、調べてもらうと、Dormant Account（休眠口座）扱いで残っていることがわかった。これを「起こし」て、残金を新たに開く予定の普通口座預金に移すことにしたのだが、普通口座は住むところの近くの支店で開いたほうがいだろう、ということになった。

さて、翌日、家の近くの支店に行ってみると、この普通口座の開設が難問だった。それには「住んでいること」の証明が必要で、名前の記載のあるガスとか水道料金の明細書で用は足りる、というのだが、まだ住み始めたばかりで一切その手の書類がない。ロンドン大学からの受け入れの手紙や日本のイギリス大使館でもらってきたヴィザなどを提示しても、それではだめだという。「日本からお金を送ってもらったりするのに困るから、ぜひ、早く開きたい」とごねると、それなら、そういう専門の口座 International Bank Accountを開く支店があるのでそちらへ行け、と言う。で、行ってみた。

その支店は足を踏み入れた途端、違和感を覚えた。異様にゴージャスなのだ。店員が近づいてきたが、いかにも恰好がよく、いきなり名刺を差し出し握手を求めてきた。話をしていると、勘違いが明らかになった。その支店は、世界を股にかけてビジネスをしているような人が口座を開くところだったのだ。

結局、翌日元の支店に戻って、あれ、違いましたよ、と説明すると、今度はあっさりと普通口座が開けた。え？ どうして…？